

## 弥陀ヶ原の火山活動解説資料（令和8年1月）

気象庁地震火山部  
火山監視・警報センター

地獄谷周辺の地震活動は低調で、火山活動によるとみられる地殻変動も認められませんが、地獄谷では活発な熱活動が続いていますので、今後の火山活動の推移に注意してください。また、地獄谷付近では火山ガスに注意が必要です。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

### ○ 活動概況

#### ・ 噴気など表面現象の状況（図1、図3-①）

芦峠<sup>あしこう</sup>監視カメラ（弥陀ヶ原の西約18km）による観測では、地獄谷からの噴気の高さは200m以下で経過しました。

#### ・ 地震や微動の発生状況（図2、図3-②）

今期間、地獄谷周辺の地震活動は、低調に経過しました。  
火山性微動は観測されませんでした。

#### ・ 地殻変動の状況（図3-③～⑥、図4）

地殻変動観測では、火山活動によるとみられる特段の変化は認められません。



図1 弥陀ヶ原 地獄谷からの噴気の状況（橙丸）（1月4日、芦峠監視カメラによる）

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧できます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

次回の火山活動解説資料（令和8年2月分）は令和8年3月9日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、名古屋大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所及び公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』を使用しています。

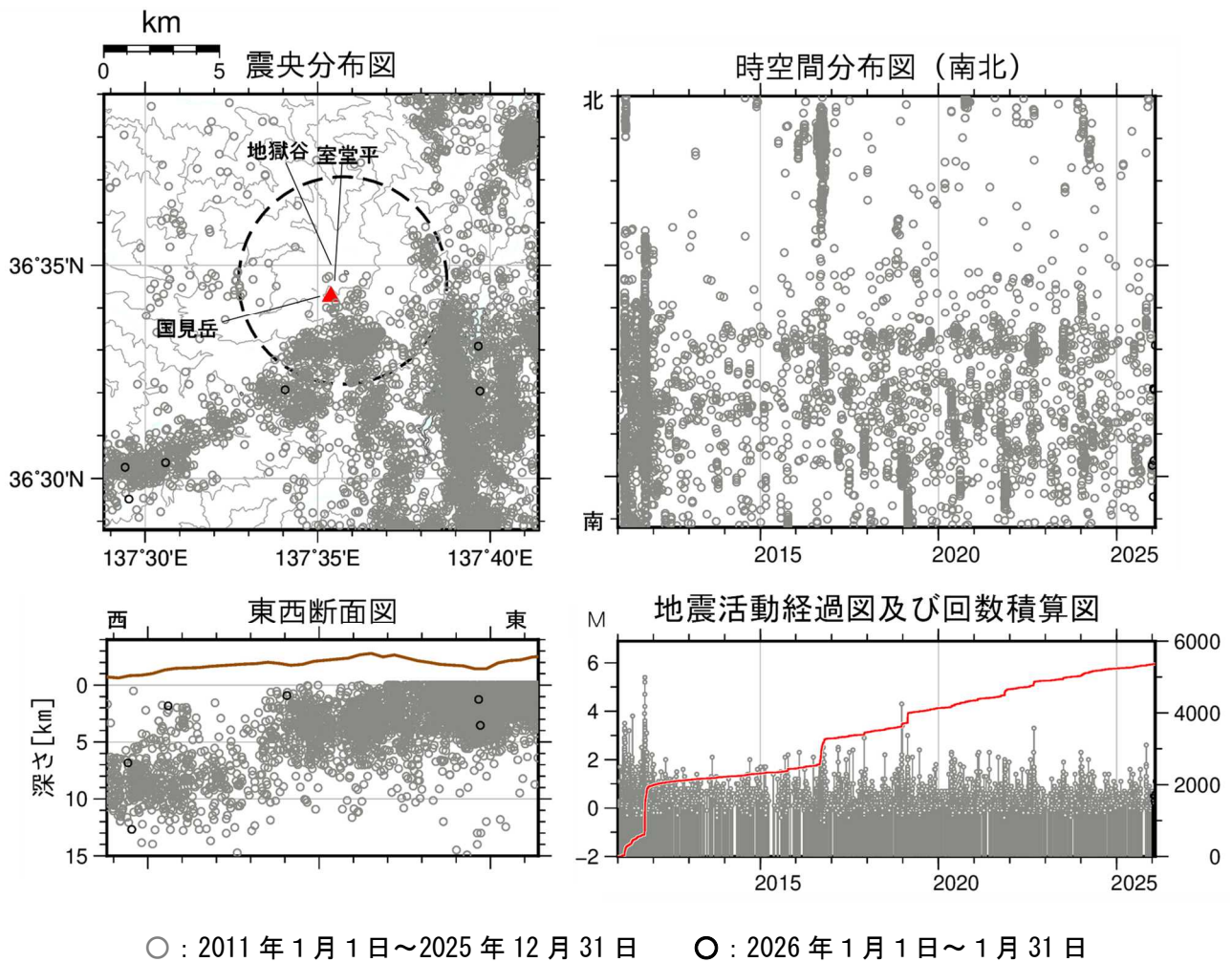


図2 弥陀ヶ原 広域地震観測網による山体・周辺の地震活動（2011年1月1日～2026年1月31日）  
震央分布図中の円は弥陀ヶ原の計数対象地震（室堂平でS-P時間1秒以内）のおよその範囲を示しています。  
広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020年9月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しています。  
図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。

・今期間、地獄谷周辺の地震活動は、低調に経過しました。

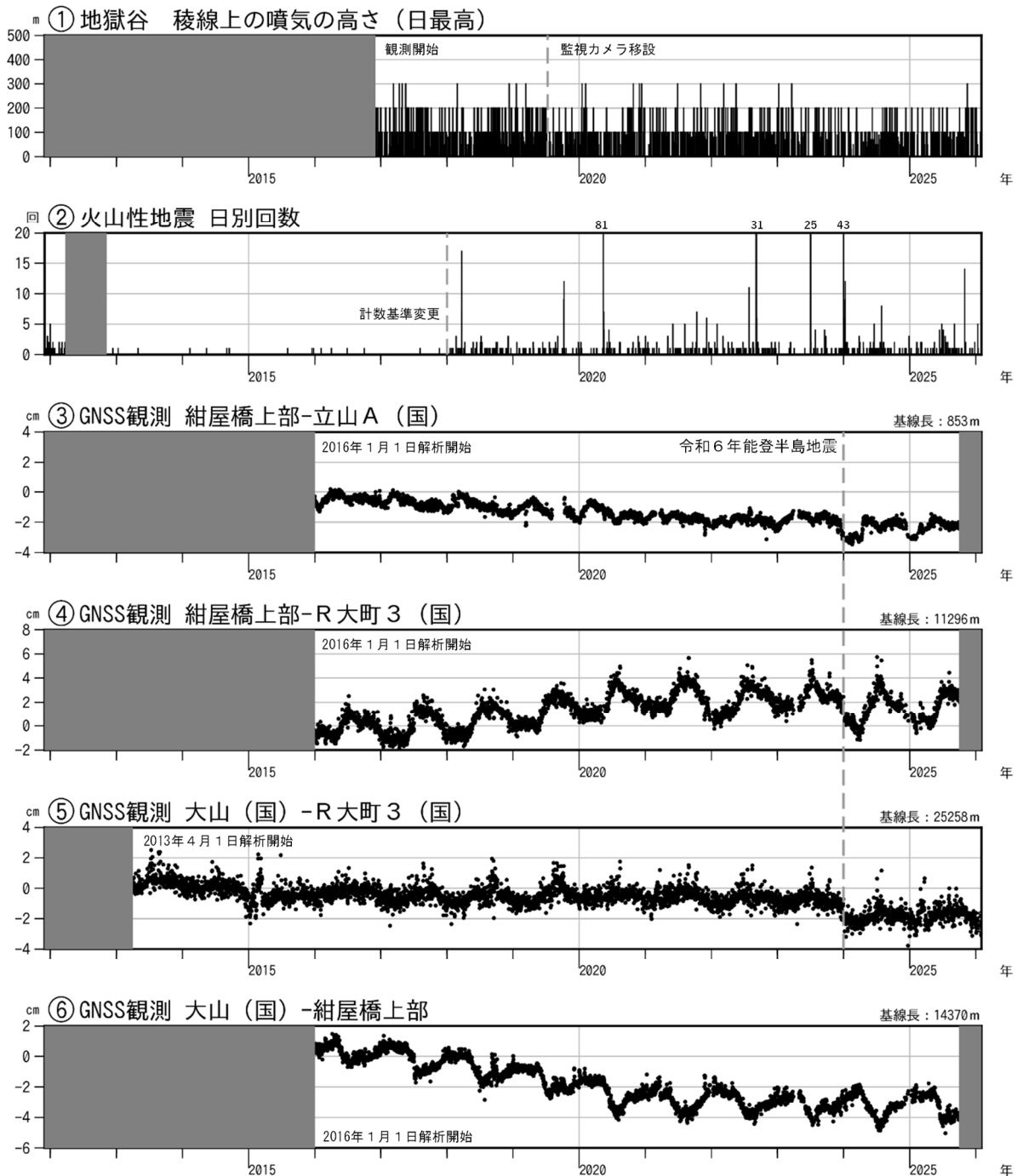


図3 弥陀ヶ原 火山活動経過図（2011年12月1日～2026年1月31日）

①噴気の高さの観測は2016年12月1日開始

\* 監視カメラの移設

2019年7月10日まで：瀬戸蔵山西監視カメラによる

2019年7月11日から：芦峯監視カメラによる

①、③～⑥灰色部分は観測・解析開始以前または欠測を示しています。

②灰色部分は機器障害による欠測を示しています。

\* 火山性地震の計数基準

2017年12月まで：立山室堂2の上下動成分で最大振幅40 $\mu$ m/s以上、S-P時間1.0秒以内

2018年1月から：室堂平の上下動成分で最大振幅1 $\mu$ m/s以上、S-P時間1.0秒以内

③～⑥GNSS連続観測による基線長変化、空白部分は欠測を示します。（国）：国土地理院

・地獄谷からの噴気の高さは200m以下で経過しました。

・今期間、地獄谷周辺の地震活動は、低調に経過しました。2018年1月の計数基準変更以降、時々地震回数の急増が見られますが、いずれも地獄谷から離れた場所で発生した地震によるものです（②）。

・GNSS観測では、火山活動によるとみられる変動は認められませんでした。また、令和6年能登半島地震によると考えられる変動がみられます（③～⑤）。

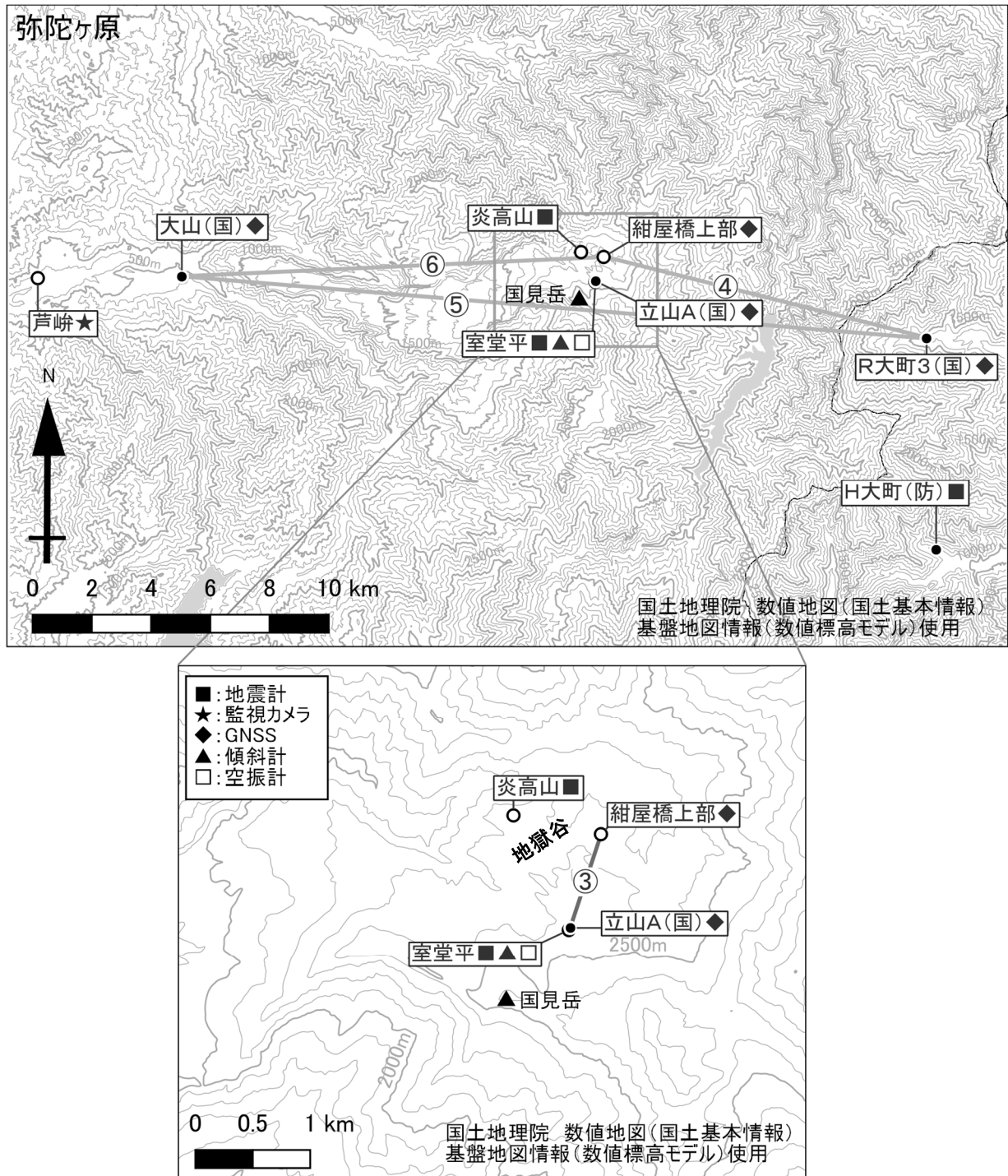


図4 弥陀ヶ原 観測点配置図

図中の GNSS 基線③～⑥は図3の③～⑥にそれぞれ対応しています。

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所